

イザヤ書1-2章 「神に背く民」

1A 罪からの立ち返り 1

1B 自らを傷つける民 1-9

2B 忌み嫌われる捧げ物 10-20

3B 遊女になった都 21-31

2A 神への立ち返り 2

1B 世界にそびえ立つ主の山 1-5

2B 富と偶像の町 6-9

3B 主の恐るべき御顔 10-22

本文

イザヤ書の学びをこれから始めます。私たちはモーセ五書から歴史書へ、そして詩歌に入って、主との関係を詩や歌によって言い表していました。私たちは前回、雅歌を読んでいき、そこにある麗しく熱い、夫婦の関係を読みました。そしてそれは、神とご自分の民との関係をも示しているものであり、私たち教会とキリストの関係をも示していました。けれども預言書は、その関係から離れてしまった民に対する言葉になっています。主ご自身の愛から民が離れてしまって、それで主が何とかして彼らを立ち返らせ、滅びから免れるようにされる、その叫びの言葉を読みます。一見、厳しい言葉ばかりが並んでいるようで、実は主のほとばしる愛から出ている言葉であることを知ることでしょう。

ところでイザヤ書は、新約聖書で最も引用されている旧約聖書であります。イエス様ご自身も、しばしばイザヤ書からの言葉を引用されました(例:マルコ 7:6-7)。そして、イザヤ書自体が聖書全体の救済、つまり救いのご計画を教えている書物であると言われていました。「イザヤ」という名前が「救いはヤハウエのもの」という意味です。アッシリヤからエルサレムが救われることによって、救いは主によってくることをこれからユダは悟ります。そして、後にバビロンに囚われの身となりますが、そこでバビロンをペルシヤの君クロスが倒して、ユダの民を解放して、帰還させるという救いも体験します。そして、ついに主のしもべご自身、キリストがその罪の贖いによってイスラエルの民を救うことを預言します。それだけでなく、諸国の民もキリストを王として拝し、世界からやって来て、この地上が神の国になることを預言し、最後は、この地、この天そのものが全く新しくされる、新天新地の幻で終わります。救いはヤハウエのものです。そして私たちの生活における救いも、ヤハウエのものです。「ヤハウエは救い」という意味であるイエスの御名によって、私たちの生活は救いの物語を神は展開してくださっています。

そして、イザヤ書全体を読まれた方は、その話の流れが 40 章から一気に変わること気づくはずで、1 章においては、午前礼拝で話しましたように「罪を犯す国、咎重き民」というように、ご自

分の民に対する叱責、罪からの立ち返りを呼びかけているのに対して、40章以降は、「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」と主がエルサレムに対して優しく語りかけているところから始まります。既にバビロンでの生活において、自分たちの罪によって痛めつけられた民に神が慰めを与えられるのが40章以降です。そこで、1章から39章が前半部分、40章から66章が後半と区別することができます。章を数えると前半が39章分、後半が27章分です。旧約聖書の数が39巻あります。新約聖書の数が27巻あります。ですから、その主題も前半が旧約聖書に色濃く出ている、イスラエルの律法違反による神の呪い、裁きが書かれており、後半は新約聖書に展開されている、律法の完成者であるキリストが、神の祝福を信じる者に与えられるその慰めが書かれています。イエス様が公生涯を始められる時に、ナザレのシナゴフでイザヤ書を読まれましたね(ルカ4:17-21)。それは後半部分にあり、神の慰めでした。「主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。」と読まれて、イエス様は「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」と言われました。

1A 罪からの立ち返り 1

以上がイザヤ書の大まかな流れです。それでは本文を読んで、さらに歴史背景を説明してみましょう。

1B 自らを傷つける民 1-9

1:1 アモツの子イザヤの幻。これは彼が、ユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見たものである。

イザヤ書を読む時に、ここに書いてある王たちの記録を読み直す必要があります。それは列王記第二15章から21章まで、歴代誌第二26章から33章までに書いてあります。

この時に、イスラエルの民は約束の地に来てから約七百年が経っていました。そしてダビデによって王国がイスラエルに建てられてから約三百年が経っています。ダビデそしてソロモンによって、国は大きく強くなり、平和と繁栄が保たれていました。しかしソロモンが晩年主から離れてしまい、それで主は彼の国を、二つに引き裂くようにされたのです。彼の部下ヤロブアムが、彼の死後に反逆したのです。ユダの王レハブアムの時にヤロブアムのほうに十の北の部族が付いていき、それで北イスラエルと南ユダに分裂しました。それが紀元前917年のことです。ヤロブアムは金の子牛を造らせ、勝手に祭司も立てて、偶像礼拝の罪を犯させました。それが北イスラエルの国是になってしまったので、その後の王たちもヤロブアムの罪から誰も離れることができませんでした。ユダの王たちは、エルサレムに神が選ばれた宮があり、また祭司たちも神の選びによる者たちであり、霊的に逸れてしまったことがあるものの、主の目になつたことを行なつた王たちもいました。そのように、王たちの不従順のために周囲の国々がこれまでは従属していたものが反発して独立したり、小競り合いの戦いをイスラエルに対してするようになりました。

けれども、そのような小競り合いの戦いなど、まるで無に等しくさせるようなとんでもない国が、現われたのです。イスラエルまたその周辺国は、南には大国エジプトがいましたが、北から出てきたアッシリヤ国の脅威に次第にさらされていくこととなります。ですから、アッシリヤが北から攻めてきて、それでアッシリヤに屈服するか、それとも南のエジプトと同盟を結ぶか？そして、周囲の国々と連合して集団的自衛権を行使するか。それとも、中立・独立を保つか？という選択が迫られました。主の御心は、「わたしはシオンにいる。シオンにこそ救いがある。」というものでした。どの国々にも頼らず、主がアッシリヤから救ってくださるという御心です。そして、ヒゼキヤの治世においてはバビロンも台頭しつつありました。後にヨシヤの時代に、カルケミシュの戦いでアッシリヤがバビロンに敗れて、それでネブカデネザルが現われ、今度はバビロンがユダの国に攻めてくるようになる、という状況です。

ですから、イザヤはウジヤの時代からヒゼキヤの時代まで預言をしていました。ウジヤが死んだのが紀元前 740 年で、その前から活動してヒゼキヤが死んだのが 686 年なので、大体 60 年から 70 年の間、預言をしていたこととなります。そして 2 節以降は、ウジヤの治世の時に預言したものだと思われます。

ウジヤはダビデとソロモンの治世以来、ユダが最も大きく、強くなった時代の王でした。それは歴代誌第二 26 章に書いてあります。彼は主の目にかなうことを行ない、その上、領土が広がり、農業も盛んになり、軍事的にも防備をしっかり行ない、兵力や武器も増強できました。このように強く、豊かな国になったのです。けれども、預言者というのは、神の御霊によって与えられた悟りがあります。人々の目には正しいことのように見えているところに、神はすべてを見通しておられて、人の心が主ではなく異なるところにあったのを預言者は示されていました。ちょうどそれは、イエス様がオリーブ山から神殿を見ておられて、弟子たちはその荘厳な建物に驚いていたけれども、イエス様は、そこには実が結ばれていない生い茂った木しかなく、根こそぎ取られてしまうだろうというものを見ておられました。私たちはしばしば、神から警告を受ける時に、「そんなはずはないでしょう。」と普通は感じてしまうようなことを神は言われます。けれども、警告しているのですから、私たちは大丈夫だと思っけていても、心に留め、耳を傾けなければいけないのです。

1:2 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。「子らはわたしが大きくし、育てた。しかし彼らはわたしに逆らった。1:3 牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉おけを知っている。それなのに、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

主は、これから彼らの罪を明らかにされますが、今朝お話したように法廷を想定しながら語られています。ご自身が原告、そしてイスラエルの民が被告です。証言台に、天と地を呼んでいます。つまり、天も見ているし、地上も見ているはずだ、と、イスラエルのしたことは明らかであることを教えておられます。それは、「ご自身が造られ、育てられた者たちが、逆らってしまった。」ということです。しかも、家畜でさえ飼い主を覚えているのに、彼らは悟っていないということです。そして、こ

れは育てられているからこそ、愛されているからこそ、かえって神から離れるという逆説的なことが起こっている、ということを今朝は話しました。

この忘れている状態は、彼らが知識的に神を忘れたということではありません。むしろ、神殿において、いけにえも捧げているのです。祈りも捧げています。それにも関わらず、実質は主を捨てていると言われるのです。ですからこれは、教会には来ている、自分がイエスは信じていると言っても、そこに働かれる御霊の導きを聞かなくなり、心が離れてしまっているということ、自分の欲すること、自分の願っていることを、神の欲すること、願っていることよりも優先させていくという、徐々に起こっている姿なのです。

1:4 ああ。罪を犯す国、咎重き民、悪を行なう者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。

私たちは自分が神に反逆していると考えたことは少ないです。性格の弱さであるとか、つまづいてこうなったのだ、であるとか、いろいろな理由を付けます。けれども、私たちが真の魂の癒しを得るには、自分の肉が神に従っていない、神に反逆しているのだということを認めることです。ここに、「イスラエルの聖なる方」という神の呼び名がありますが、これはイザヤ書で数多く出てくる呼び名です。イザヤは、6章で主の御座の幻を見て、「私は災いだ」と叫びました。もう自分はだめだ、と嘆きました。御座にあるその聖さを表しています。私たちは、他の人と比べたら反逆ということは思わないでしょうが、聖なる神がおられて、その神に対して反逆しているのだということです。

1:5 あなたがたは、なおもどこを打たれようというのか。反逆に反逆を重ねて。頭は残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果てている。1:6 足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。

私たちが神に反逆すれば、神は損をしません。神は神で、そのまま全く変わらずに存在することができます。そして、神は背かれたので、傷ついて怒って、私たちが傷つけるのではありません。そうではなく、自分で自分を傷つけていることをしているのです。神は最善を考えて、私たちに命令を与えておられます。その命令に従うことは、私たちが守られることであり、最も幸福になれることです。ところが、それから離れるのですから自ら傷つけることになります。主は癒したいと願われています。けれども、その愛のゆえに、心を開かない者のその閉ざしている心を、無理やりこじ開けることはできないのです。

1:7 あなたがたの国は荒れ果てている。あなたがたの町々は火で焼かれ、畑は、あなたがたの前で、他国人が食い荒らし、他国人の破滅にも似て荒れ果てている。1:8 しかし、シオンの娘は残された。あたかもぶどう畑の小屋のように、きゅうり畑の番小屋のように、包囲された町のように。1:9 もしも、万軍の主が、少しの生き残りの者を私たちに残されなかったら、私たちがソドムのように

になり、ゴモラと同じようになっていた。

イスラエルを一人の人間に喩えて語っておられましたが、傷とは具体的にこのように国が荒れ果てている、町々が火で焼かれている。そして、他国人に食い荒らされています。しかし、であります。この「しかし」が、イザヤ書の特徴です。主が激しくご自分の民を責めておられますが、主は必ず回復を与えてくださいます。「残された」とありますが、「残りの民」という言葉が繰り返しイザヤ書では出てきます。主が私たちに時に与えられる懲らしめ、あるいは試練があります。それによって、私たちの内にある不純物が練り清められます。私たちの品性が練られます。ただ主のみに信頼する、そして主の救いのみを待ち望むようにされます。

そして主はこのようにして、残された者たちを通して働いてくださいます。イスラエルの民の中でも、ギデオンの戦いの時に、相手は 13 万 5 千人のミデヤン人でしたが、3 万 2 千人いるイスラエル人のうち、わずか 300 人だけが残りしました。しかし、その 300 人で 13 万 5 千人に対して主は戦ってくださったのです。同じように、イスラエルの国はアッシリヤによって滅ぼされ、ユダも町々が全て倒れ、残りわずか、エルサレム、シオンだけになりました。アッシリヤに取り囲まれます。けれども、この「シオンの娘」によって主はアッシリヤ軍を滅ぼされるのです。

そして 9 節に大きな原則があります。主を敬う残りの人がいれば、その民全体を滅ぼさないという原則です。アブラハムがソドムとゴモラのための執り成しをしました。主は、正しい人が十人しかいなくても町全体を赦すと言われました。実際には十人もいませんでした。けれども一人の正しい人口のために、本人とその家族が町を出て行くの見届けてから、火と硫黄で滅ぼされたのです。主は決して、正しい人と悪人をともに滅ぼすことはありません。ですから、信仰によって義と認められた人たちがこの地上にある限り、神の怒りの現れである大患難が地上に下ることはないのです。

2B 忌み嫌われる捧げ物 10-20

1:10 聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。
1:11 「あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になろう。」と、主は仰せられる。「わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。1:12 あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよ、とあなたがたに求めたのか。1:13a もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙・それもわたしの忌みきらうもの。

ソドム、ゴモラとは、ユダの指導者、またユダの民に対してそう呼んでおられます。彼らがどんなにいけにえを捧げても、やっていることはソドムやゴモラと同じことをしているではないか、ということです。そして今、主は神殿で礼拝を捧げようとしている祭司たちの奉仕を辿っておられます。祭司がいけにえを祭壇で捧げます。ほふって、祭壇に血を注ぎます。それから聖所に入って香を焚きます。この一連の行為について、主は喜んでおられない、忌み嫌うものだと言われています。そ

して、「わたしの庭を踏みつけている」と言われていますが、これは侮っていることを示しています。同じ言い回しが、ヘブル書 10 章 29 節に出てきます。「神の御子を踏みつけ」と言っています。

1:13b 新月の祭りや安息日・・会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。
1:14 あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。1:15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。

新月の祭りは、安息日、年に七回の例祭があります。これらの全てを主は憎むとまで言われています。そして疲れ果てているとまで言われています。これはつまり、言い換えれば私たち教会が、キリストの誕生を祝うクリスマス、復活を祝うイースター、またペンテコステ礼拝など、これらが神には忌まわしいと言われているようなものです。そして、私たちは手を合わせて祈ったりしますが、聖書では手を上に差し伸べて祈る場面があります。天に対してその祈りが向けられているということですが、主は聞かれません。

午前礼拝でも話しましたが言い換えるとうなります。本当に自分の心で思っていることを、霊的な装いをつけて隠すことさえできるということです。イエス様とユダヤ人とのやり取りを思い出してください、イエス様は「あなたがたは真理に留まれば、自由になれるのです。」と言われたら、「私たちは奴隷になったことはありません。」と彼らは反発したのです。「まるで、私たちがローマの奴隷であるかのように話さないでほしい。」と彼らは思ったのでしょうか。しかしイエス様は、「あなたがたは罪の奴隷なのです。そして子が自由にするから、自由にされます。」と言い換えられました。

けれども、彼らは「私たちの父はアブラハムです。私たちはアブラハムの子なのですよ。」と反発します。アブラハムの子たちなのだから、奴隷の身であるはずがないというのです。それで、「私たちにひとり父、神がいます。」と言いました。ところが、イエス様は「あなたがたの父は悪魔です。」と言われたのです。ものすごい言葉ですが、それは彼らが心の中でイエスを殺そうという殺意を抱いていたのです。心は憎しみと妬みでいっぱいだったのに、アブラハムであるとか、神であるとか、自分たちの心を見ずに霊的知識を使っています。

1:16 洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。
1:17 善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」

イザヤの一連の叱責と勧めは、ヤコブが手紙の中で書いたことです。その手紙は、教会の中にいる人々に書かれたものです。教会生活をしているなかで、成長し、成熟へと向かわないといけません。その成長ができないと、教会生活が単調になって、御言葉への感動がなくなり、それを聞いているけれども行なっていない、実際にどう生かせばよいか分かっていないという状態になります。

ですから、口では信仰についていろいろ語れても、それと行ないが離反しているのです。そこで、ヤコブが戒めました。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。(ヤコブ 4:8)」口と心が離反している状態、これを心を引き裂くことによって一つにするのです。

1:18 「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。1:19 もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、この国の良い物を食べることができる。1:20 しかし、もし拒み、そむくなら、あなたがたは剣にのまれる。」と、主の御口が語られた。

ここはとても大事です。私たちのすることは、心を引き裂き、へりくだることですが、その心を清めるのは主ご自身です。主が聖霊の力によって私たちの心を一新してくださいます。私たちはどうしても、「では、どうすればいいのですか？」と尋ねるのです。あたかも、自分が何かを行なえばよく思われるのではないかと考えるのです。いいえ行ないではありません、信仰によって聞くのです。そして悔い改めるのです。主は即時に、全き清めを与えてくださいます。御霊によって、キリストの血潮によって与えてくださいます。

ですから応答は、19 節「喜んで聞こうとするなら」となっています。自らその福音の言葉を聞くなれば、ユダの国を、その土地を回復してくださいます。私たちは、いろいろなことが周りで起こっていて、こうすればよい、ああすればよい、と考えてしまっていますが、一つ大事なことを忘れてますね。主の前に悔い改め、回復を祈ることです。願わないから、聞かれないのです。

3B 遊女になった都 21-31

1:21 どうして、遊女になったのか、忠信な都が。公正があふれ、正義がそこに宿っていたのに。今は人殺しばかりだ。1:22 おまえの銀は、かなかすになった。おまえの良い酒も、水で割ってある。1:23 おまえのつかさたちは反逆者、盗人の仲間。みな、わいろを愛し、報酬を追い求める。みなしごのために正しいさばきをせず、やもめの訴えも彼らは取り上げない。

ここでの忠信な都というのは、ダビデがエルサレムを治めていた時のことを言っているでしょう。エルサレムを一人の女に喩えておられます。雅歌の時に話したように、神が男から女を造られ、それで結婚の制度を定められたのは、ご自身と契約の民の関係を示すためでした。「忠信」と訳されていますが、これは「貞節を守る」と言い換えて良いでしょう。ただ主なる神だけを愛するという忠誠です。それがなくなると姦淫をしているのと同じになり、それで「遊女」と呼ばれています。ですから、私たちとイエス様の関係はこのように熱いものなのです。イエスを愛するのであれば、家族でさえも、また自分の命でさえも憎むというほどの献身であり、明け渡しです。そして、銀がかなかす、良い酒が水で割ったというのは、「役に立たなくなった」ということです。イエス様が言われた、塩気をなくした塩であり、地に捨てられるものになるということです。私たちが、人間的な気持ちや考え

を教会にも取り入れなければいけないとすれば、たちまち価値のないものになってしまいます。

1:24 それゆえに、万軍の主、イスラエルの全能者、主の御告げ。・「ああ。わたしの仇に思いを晴らし、わたしの敵に復讐しよう。1:25 しかし、おまえの上に再びわが手を伸ばし、おまえのかなかすを灰汁のように溶かし、その浮きかすをみな除こう。1:26 こうして、おまえのさばきつかさたちを初めのように、おまえの議官たちを昔のようにしよう。そうして後、おまえは正義の町、忠信な都と呼ばれよう。」1:27 シオンは公正によって贖われ、その町の悔い改める者は正義によって贖われる。

孤児ややもめなどが不正な裁判における被害者です。お金ですべて片が付くのですから、お金を持っていない人々の訴えがいつも退かれます。けれども、「万軍の主」がその人たちを擁護されます。「万軍」というのは天使の軍勢を意味しますが、軍事的意味合いを持った神の呼び名です。いかに権力を持った指導者でさえも、はるかに力を持っておられる万軍の主が今、それら捨てられた孤児ややもめのために戦ってくださいます。不正を行なっている裁判官や指導者を除去されます。そして、主は正しいさばきつかさを置いてくださいます。こうして初めのように、エルサレムを正義の町、忠信な都としてくださいます。

私たちも同じです。福音の真理の言葉、聖書の言葉をしっかりと語っていく中で、聖霊が不正や欲望を私たちの中から取り除いてくださいます。そして、その聖潔、聖めの中で、悔い改める者が起こされ、罪赦されて贖われる者も出てきます。

1:28 そむく者は罪人とともに破滅し、主を捨てる者は、うせ果てる。1:29 まことに、彼らは、あなたがたの慕った榿の木で恥を見、あなたがたは、みずから選んだ園によってはずかしめを受けよう。1:30 あなたがたは葉のしぼんだ榿の木のように、水のない園のようになるからだ。1:31 つわものは麻くずに、そのわざは火花になり、その二つとも燃え立って、これを消す者がいない。

ユダの民だからと言って、救いが自動的に保証されているのではありません。中には、悔い改めることなく悪を行ない続けており、世が滅びると同じように滅びることもあるのです。ここで彼らが行っているのは偶像礼拝です。「57:5 あなたがたは、榿の木の間や、すべての生い茂る木の下で、身を焦がし、谷や、岩のはざままで子どもをほふっているではないか。」榿の木の下で偶像礼拝を行ないました。その儀式の一環として不品行を行なっていました。そして要らぬ妊娠をするので、その子たちをほふっているのです。こうやって主はえこひいきをすることなく、それらを行なっている異教徒と同じように裁かれる、ということをおっしゃっています。パウロの書簡の中に何度となく、正しくない者は神の国を受け継ぐことはない、だまされてはいけない、と言いました。

2A 神への立ち返り 2

そしてイザヤは、2章から4章にかけて「終わりの日」のおける幻を受けています。今日はその2

章の部分を読みます。

1B 世界にそびえ立つ主の山 1-5

2:1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて示された先見のことば。2:2 終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。2:3 多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。2:4 主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。2:5 来たれ。ヤコブの家よ。私たちが主の光に歩もう。

驚くべき幻です。イザヤは、世界の中で小粒ほどしかないユダとその都エルサレムに対して預言していましたが、その町、シオンの山が世界の中でも有数の高い山になります。なぜなら、そこに主がおられて、主の宮がそこにあり、そして世界の人々がこの方を参拝しに来るからです。そして何を期待しているかと言いますと、主ご自身の教え、その道を聞くためであります。世界中の人々が、異邦人の人々がイスラエルの聖なる方の言葉を聞くのです。このようにして主が治められるので、国々は戦うことを学ばず、かえって土地を耕す農業によって土地を豊かなものにしていきます。そして最後に呼びかけです、他の国々がこのように主の教えを学んでいるのだから、私たちが主の光に歩もう、と呼びかけています。主の教えについて異邦人のほうが先に聞いていて、当のイスラエルの人々が後手に回っているんですね。

このことは、主イエス・キリストが地上に戻って来られる再臨の後に実現します。ゼカリヤ 14 章に詳しく書かれています。世界の軍隊がエルサレムに攻めてきますが、主ご自身が軍隊に戦われます。彼らはことごとく滅ぼされ、そしてエルサレムはオリーブ山が真っ二つに割れるなど、地殻変動が起こります。そして、シオンの山がひとときわ、際だって高い高地のようになります。そして「主は地のすべての王となられる。その日には、主はただひとり、御名もただ一つとなる。(14:9)」とあります。そして世界の国々はこの方に拝するために、エルサレムにやって来るのです。

ところで、なぜ山なのか？山は、聖書の中に出てくる幻で王たちを表していたりします。国にある権威や力を表しています。他の山々よりもシオンの山が高くなるというのは、この方があらゆる名よりも高い名が与えられた、この方こそが王の王で、主権者であられることを示しています。すべての膝がかがめられ、全ての舌が「イエス・キリストが主である。」と告白しているのです(ピリピ 4:9-11)。そして、御言葉が語られます。聖書には旧約、新約を通じて、主はこのような形でご自分の民を集めました。旧約においては、シナイ山においてです。主はシナイ山に現れて、ご自分の言葉を教えとして与えられました。新約においては、山上の垂訓においてです。主イエスは山に上られて、そこに弟子たちが付いて行って、そこで「霊において乞食になっている者は幸いである。天の御国はその人のものである。」と語られました。その言葉は、従ってもいいし、従わなくてもよい、

という選択ではありませんでした。絶対的な主権者が、王が語っておられる言葉であり、ひれ伏しながら、恐れおののきながら聞くのです。そしてその王の臣民として仕えるのです。

そして、このことを行なっているから、国が国に対して武器を取らなくなるようになる、平和になります。世界平和は平和の君キリストが再臨されて初めて実現します。しかし、武器を取っていないという平和だけでなく、土地を耕して豊かになるという意味での平和もあります。ヘブル語の平和、シャロームには繁栄も含まれるのです。興味深い文章を二日前に読みましたが、国際政治学と、平和学においては、平和の定義が異なるということを知りました。国際政治では物理的な暴力がない状態を平和と定義づけるのですが、平和学においては貧困や差別、不平等といった構造的暴力もない状態のことを言います。ですから、主のもたらす平和は、このどちらの意味も満たしているのです。1章23節で、みなしごやもめのために正しく裁いていないことを主は責められました。こうした人々がいることも平和にはなっていない証拠ということなのです。

ですから、私たちの間にも平和があるためには、その繁栄があるためにはどうすればよいのか？そうです、キリストを第一の方とすることです。ちょうど私たちが、山上の垂訓を聞いている弟子のようにすることです。その間には、弟子たちの間に平和があったように、いや喧嘩してもそれでも主の戒めの言葉がありそれを守ったように、平和があります。そして、主に完全に服従している、聖霊に満ちた弟子たちの間には豊かさもあります。自分を選ぶと、争いがあります。

2B 富と偶像の町 6-9

2:6 まことに、あなたは、あなたの民、ヤコブの家を捨てられた。彼らの国がペリシテ人の国のように東方からのト者で満ち、外国人の子らであふれているからだ。2:7 その国は金や銀で満ち、その財宝は限りなく、その国は馬で満ち、その戦車も数限りない。2:8 その国は偽りの神々で満ち、彼らは、自分の手で造った物、指で造った物を拜んでいる。2:9 こうして人はかがめられ、人間は低くされた。..彼らをお赦しにならないように。..

1節から5節までは、主が御心としておられるエルサレムの姿ですが、イザヤは今のエルサレムとユダの国について話しています。ヤコブの家が、主の教えに聞き、光の中を歩み、それで異邦人たちが偶像から立ち返って主なる神に仕えるのではなく、その逆が起こっています。隣の異邦人の国ペリシテと同じように、東方からの占いを行ない、混血によって外国人がたくさんいる状態です。そして金銀で満ちていて、軍事力もあります。これら自体は間違っただけではありません、問題はこれらの富や力に安住していて、生ける真の神を求めていないことです。その結果、彼らの心に偶像ができ、実際の偶像も持っていました。

彼らの根っこにある問題は「高ぶり」です。私がここで言っている「高ぶり」とは、威張り散らしていることではありません。聖書の言う高ぶりとは、「神を押しよけてでも、私は正しい、私は自分で生きていきます。」という反抗心、独立心のことです。イスラエルは荒野の旅においては、何もなく、

主のご臨在だけがありました。自分たちの食べ物はマナ、また岩からの水というように、主が共におられるということと日用の糧が密接に結びついていました。そこで主は約束の地に入って、何不自由なく作物に恵まれ、豊かになった時に、主なる神を忘れることがないようにと戒められたのです。そしてその行き着く先は偶像礼拝だと警告されました。しかし、はたして彼らは主を忘れてしまい、それで行ったのは自分の欲望に仕えてくれる偶像を拝んだことです。

先ほどの幻に、主の家から教えがあったとありましたが、イエス様は山上の垂訓で、「神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすればこれらのものは、加えて与えられる。」と言われました。その優先順位がおかしくなった時に、ユダの国で起こったことが私たちにも襲います。自分の都合を主の願われていることよりも優先させていけば、私たちは生活の安全保障を神ではなく、他のものに求めるようになります。そして自分は主に仕えていると思いながら、実は心の中で、自分の都合に仕えてくれる偶像に従うようになってしまうのです。

そうするとどうなるのか？9 節にあります、偶像に使えるようになると人間性を失わせます。その尊厳が貶められます。自分は幸せになるために、神ではなく他のものを求めます。けれども、求めれば求めるほど、自分の求めていたものから遠ざけられてしまいます。

3B 主の恐るべき御顔 10-22

2:10 岩の間にはいり、ちりの中に身を隠せ。主の恐るべき御顔を避け、そのご威光の輝きを避けて。2:11 その日には、高ぶる者の目も低くされ、高慢な者もかがめられ、主おひとりだけが高められる。

イザヤは再び、終わりの日の幻に戻っています。「その日」と書かれているのは、主が究極的にご自分の考えておられることを実現される、主ご自身が定められた時のことを指します。ですから、終わりの日のことを指しています。主は、ここに書かれているように、終わりの日にご自分の顔を地上に向ける時を定めておられます。その顔とは、聖なるご性質をともなった顔です。それをそのまま向けられるのであれば、高ぶった人々はたちまち滅ぼされてしまいます。高ぶりとは、すなわち「私は、神のように生きていきたい」ということです。ですから、真の神の威光が現われる時に、その御顔はその高ぶる者を滅ぼすという、怒りに満ちた顔になっているのです。

黙示録 6 章がこいイザヤ書 2 章 10 節以降にある災いを、さらに細かく啓示しています。小羊イエスが、巻き物を御座におられる父なる神から受け取られました。そしてそこには七つの封印がありますが、その一つ一つを解いていかれました。そして第六の封印を解かれた時に起こったことです。「6:12-17 私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血ようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇

者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日に来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

2:12 まことに、万軍の主の日は、すべておごり高ぶる者、すべて誇る者に襲いかかり、これを低くする。2:13 高くそびえるレバノンのすべての杉の木と、バシヤンのすべての檜の木、2:14 すべての高い山々と、すべてのそびえる峰々、2:15 すべてのそそり立つやぐらと、堅固な城壁、2:16 タルシシュのすべての船、すべての慕わしい船に襲いかかる。2:17 その日には、高ぶる者はかがめられ、高慢な者は低くされ、主おひとりだけが高められる。2:18 偽りの神々は消えうせる。

当時、高められていると思われるあらゆるものを、イザヤはここで列挙しています。自然にしても例外はありません。レバノンの杉の木はその地域で有名です。今でもすぐれた姿をしています。そしてバシヤンは今のゴラン高原ですが、すばらしい自然の地形です。そして、その他の高い山々があります。そして人間が造った堅固な城、防壁があります。さらに貿易において中心的な役目を果たしている、今のスペインにあるタルシシュがあり、その船があります。これらのものがあるために、人々は、自分は神に頼らなくても大丈夫だ、という一種、偽りの安心感を持つわけです。それで神を求めると言っても、自分の都合に良い神、すなわち偶像、偽りの神々を持ちます。神はこれらの神々をその時に打ち壊されるのです。

2:19 主が立ち上がり、地をおののかせるとき、人々は主の恐るべき御顔を避け、ご威光の輝きを避けて、岩のほら穴や、土の穴にはいる。2:20 その日、人は、拝むために造った銀の偽りの神々と金の偽りの神々を、もぐらや、こうもりに投げやる。2:21 主が立ち上がり、地をおののかせるとき、人々は主の恐るべき御顔を避け、ご威光の輝きを避けて、岩の割れ目、巖の裂け目にはいる。

「主が立ち上がり」とあります。これは行動に移すということです。イエス様は今、神の右の座に着いておられますが、立ち上がる時が来ます。そしてこれらのことを行なわれるのです。そして、イスラエルの地には、岩や洞穴が多いです。主が栄光に輝いているのを見て、それを恐れて隠れます。それは先ほど読んだ、黙示録 6 章にも出てきた言葉です。6 章では、その恐ろしい輝くに照らされるよりも、自分が死んでしまったほうがまだと思っています。そうです、神の怒りを受けることは恐ろしいことであり、それは死ぬよりも恐ろしいのです。「生ける神の手に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 10:31)」

そして興味深いのは、彼らが偽りの神々をこの時に捨てることです。自分の都合に合わせた、自分の欲を満たす神々は、このような試練の時には役に立ちません。まことの神に向かうしか方法がなくなります。そして、それが、主がイスラエルの民に何とかして立ちあがってほしいと願われて、これらの患難を通るのを許されるのです。

2:22 鼻で息をする人間をたよりにするな。そんな者に、何の値うちがあろうか。

これが、主がお語りになりたかった要点であり、次 3 章においては、いつまでも人に頼ろうとする彼らの惨めな姿を神は明らかにしておられます。そしてイザヤ書全体にそれが貫かれています。ユダの国の問題は、彼らにアッシリヤに対して何も守る術を持っていなかったということではありません。彼らが、自分たちで守れると思っていたものがあつたことが、問題だったので。自分たちの国力、軍事であるとか経済的繁栄であるとか、そういったものに頼りました。そして、アッシリヤは脅威ですが、南にはエジプトがあり、アッシリヤの南にはバビロンが台頭し、それから自分たちの周囲には連合できる国々がありました。こうしたものがあるから、大丈夫なのだということです。しかし、主は一貫して、『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。(ゼカリヤ 4:6)」であります。

私たちが、自分の安全保障をどこにおいているのか、それを吟味してみましょう。自分が守ってくれるものはなにか、自分が頼っているものはなにか。そして、自分のできること、できないことに注目していて、主が命じられていること、そうでないことを求めていることはないでしょうか？主は、イスラエルの民に対するように、できることを敢えて妨げられることをなさいます。取り上げる時もあります。しかし、だからこそ主にこそ自分を守る源があるのだと知るので。そして、真の勝利を得ることが出来ます。

地図:アッシリヤの勢力範囲、時を経るごとに拡張していった。エルサレムだけが孤島のように自由・独立を守れた。救いはヤハウエにこそあるという、イザヤのメッセージを表す。

